

「
光
」

【あらすじ】

大学生の佐藤漑（21）は、認知症の母・和子を自宅で介護しながら、孤独な日々を送っていた。漑の心の拠り所は、ネットで知り合った「光」という女性。「光」とは連日連絡を取り合うほどの関係になっていた。

ある日、和子は漑を自身の娘と認識できなくなる。漑は母を介護施設に預ける決断をし、安堵感と罪悪感が入り混じる。漑は「光」へ普通になりたいことを吐露するが、それ以降、「光」と音信不通になる。

半年後の春。漑には川村という恋人ができ、普通の大学生の生活を手に入れる。現在の生活に満足していると語る漑だが、「光」との繋がりが消えたことへの喪失感が残っていた。

ある日、バイト先の同僚・山田の携帯を偶然見た漑は、山田も「光」とやり取りしていたことを知る。漑は再び「光」と繋がりたい一心で、山田を介して「光」と会うことになる。

喫茶店で、漑は山田が紹介する「光」と出会

う。しかし山田が紹介した「光」は本名を岡田義一と名乗り、人違いであると発覚する。

岡田は、「光」という名前はコミュニティ内のハンドルネームであり、漑が探している「光」も、岡田と同様に孤独を抱える者を支える活動をしていることを明かす。そして『友はもう一人の自分』という格言を用い、漑がやり取りしていた「光」は漑自身の孤独や悩みを写す鏡の様な存在であったと告げる。故に、漑が変わろうとしたことで、「光」との関係が途切れたのだと突きつける。

漑は「光」の気持ちを理解すべく、岡田を紹介して光コミュニティへ所属する。そこで、他者の孤独に寄り添う中で、変化の数だけ共感できる相手が増えていくことを知る。漑は「光」との関わりから学んだことを胸に、山田や川村との関係性を見つめ直すことを決意する。

介護施設を訪れた漑は、変わらず貴方は誰？と和子に問われる。漑は、窓に映る自分を見つめ、和子に対して「光」と名乗る。

【人物関係表】

佐藤 漣（21） 明成大学の学生

石狩 光（25）（14） 漣の通話相手

山田 健太（20） 漣のバイト先の同僚

岡田 義一（29） 山田のメッセージ相手

佐藤 和子（60） 漣の母親

川村 大智（21） 明成大学の学生。漣の彼氏

前田 匠（50） むつ市立中央中学校の教員

庄司 奈津美（33） 漣の通話相手※声のみ

渡辺 成美（21） 明成大学の学生

石狩 みどり（34） 光の母親

佐藤 浩（50） 漣の父親。故人

佐伯 楠生（55） 明成大学の教授

新郎（30） 漣のバイト先の客

新婦（30） 漣のバイト先の客

新婦の母親（60） 漣のバイト先の客

店員（40） 喫茶高井戸の店員

○光の自宅・洗面所（夜）

暗闇の中、洗面所の電気がつく。

石狩光（25）、鏡の前に立っている。

洗面台に置いた携帯が振動する。

携帯画面を見る光。

『光（0110）さん、出番です』と書かれたメッセージ。

リンク先が書かれたメッセージが次々と送られてくる。

光、リンクを開く。

『＃死にたい』と書かれた長文の投稿。

アカウント情報をタップする。

アカウント名は、『みお』。

『貴方の話、聞かせて下さい』とDMを送信する光。

再び鏡を見る。

岡田の声「……貴方が殺したと同義です」

○喫茶高井戸・中

レトロな内装。

項垂れて黙っている佐藤濤（21）。

机の上には溢したコーヒー。

濤の対面には、ファー付きのアウターを着た岡田義一（29）が座っている。

○明成大学・外

木々が少し紅葉し始めている様子。

○同・4号棟・第一講義室

教授の佐伯楠生（55）、教卓の前で学生達に向かって話している。

佐伯「ということで、今作ってもらったグループで4月まで活動し、発表までしてもらいますから」

後方に座る学生達、私語をし、佐伯の話聞いていない。

前方に座る濤、背後から聞こえる私語に眉をひそめながら、手元のレジュメに何か書き込んでいる。

佐伯の声「来年の研究室配属にも影響するか

ら、皆さん今回は真剣にね」

佐伯、前方で真面目に聞く漣に気づき、
微笑みを浮かべる。

漣、作り笑顔で反応する。

漣の隣に座る渡辺成美（21）、漣の机
をノックする。

漣、成美の方を向く。

成美「ねえ、これからよろしくね」

漣「（作り笑顔で）……うん」

○同・4号棟・廊下

学生達が廊下に出てくる。

漣、成美、川村大智（21）と並んで
歩いている。

川村「ねえ、これから一緒にワークするんだ
し、景気付けに飲みにも行かない？」

成美「おっ、いいねー。行こう、行こう！ね
え、佐藤さんは？」

漣「（迷った様子で）えっとー……」

○同・4号棟・外

濡、成美、川村、4号棟から出てくる。

川村「そうだよね、普通に考えて今日は無理だよね」

成美「じゃー今日は二人だけで行く？」

川村「いや、こういうのは皆で行かないと意味がないでしょー」

濡、少し戸惑った様子。

成美「えーじゃー2週間以内で行こうよ！こういうのは長引かせてもあれだし」

川村「そうしよつか。佐藤さん、バイト空いている日は？」

濡「えーと、ちょっと待ってね」

濡、沢山のメモが挟まったクリアケース付きの携帯を見る。

成美と川村も携帯を見ながら、

成美「うちはね、来週はいつでも行ける」

川村「おー飲みべ高いね。ちなみに俺は木金だったら今週も来週もいけるかな」

成美「あっ！そういえば、あそこ行きたいん

だけど。飲み放題 1000 円の所」

川村「友ちゃん？じゃあ、店はそこにする？」

成美「うん！そこにしよ！」

川村「ねえ、佐藤さんは結局いつ…」

漣、いつの間にか、その場からいなくなっている。

○京王電鉄・京王線・中

揺れる車内。漣、吊り革に捕まりながら、携帯を触っている。

画面上には、漣の自宅のライブ映像。

携帯を閉じる漣、目に生気がない。

漣の前には、談笑している女子高生達。

漣、女子高生達をじっと見つめる。

○漣の自宅・全景

20 階建ての中古マンション。

○同・和子の部屋前

漣、和子の部屋のドア前に立つ。

ため息を吐き、扉を開ける。

○同・和子の部屋

扉を開けた漚。

漚の視線の先には、介護ベッドに座り、窓の外を見つめている佐藤和子（60）。

漚「……ただいま」

和子、漚の挨拶に返答せず。

漚、諦めた表情で、扉を閉める。

○同・和子の部屋前

扉を閉めた漚、しばらく立ち尽くす。

○同・キッチン（夜）

寄せ鍋が煮込まれている様子。

慣れた手つきで料理をしている漚。

小皿にスープを注ぎ、味見をする。

その後、携帯で鍋の寄りの写真を撮る。

○同・仏間（夜）

佐藤浩（50）の遺影が置かれた仏壇。

漑、ご飯を供える。

○同・居間（夜）

漑と和子、寄せ鍋を食べている。

和子「……そういえば、お父さんは？」

漑、和子の発言に動揺することなく、

漑「お父さんはもういないでしょ」

和子、首を傾げながら、

和子「なんで？」

漑「（軽く苛立ちながら）……お父さんは大分前に車に跳ねられて死んだでしょ？今は、私と二人暮らし」

和子、表情を変えず、ご飯を口に運ぶ。

和子「……お父さんの好きなシュークリームでも買っとけばよかったね」

食卓に沈黙が流れる。

○同・漑の部屋（夜）

漑、電気をつけず、携帯でお笑い番組

を見ている。

笑いどころでも、笑顔は見せない。

部屋の壁には月齢カレンダー、幼少期の頃漑が描いた絵、漑が受賞した賞状が掛かっている。

携帯に『都市計7グループに追加しました』の通知。

廊下から大きな物音。

漑、舌打ちし、自室を出る。

○同・廊下（夜）

廊下に出てきた漑。

廊下の照明が点いていることに気づく。

漑、廊下の先で外出着に着替えている

和子の姿を見つける。

漑「（声を少し強め）お母さん、何してるの？」

和子「買いに行くのよ」

漑「何？何を買いに行くの？」

和子「シュークリーム、今から買いに行つて、

お父さんを駅に迎えに行くから」

漚「（苦笑いを浮かべながら）お父さんはもういないよ！」

和子「（不思議そうに）……なんでよ？」

漚「（痺れを切らし大きな声で）お父さんは事故で死んで、今は私と二人暮らし！お母さんの家はここ！出る必要ないの！」

和子、頭を捻りながら自室へと戻って行く。

漚、廊下で立ち尽くす。

○同・キッチン（夜）

消灯中のキッチン。

シンク前でコップに注いだ水を飲む漚。

洗い物置きに視線を向ける。

複数の皿が並ぶ中、一際目立つ包丁。

包丁をまじまじと見つめる漚。

ため息を吐き、コップを洗う。

○同・漚の部屋（夜）

タバコの煙が窓の外へと流れる様子。

漣、ベッドに座り、タバコを吸っている。

携帯の通知音が鳴る。

漣、すぐに携帯を取り、返信する。

携帯をベッドに置こうとした瞬間、再び通知音が鳴る。

漣、間髪を入れず返信しようとする。

携帯画面には光という人物から『今日、なんかあった？』のメッセージ。

光のアイコンは新月になりかけている
月齢29の画像。

漣、入力の手を止める。

携帯画面がスリープ状態になる。

漣、液晶画面に映る自身を見つめる。

○明成大学・図書館・中

漣、窓際の席で、レジュメを広げながら、外の景色を眺めている。

外には、仲睦まじそうな学生達。

学生達で賑わうキャンパスの中、小柄

で小太り、髪が薄い山田健太（20）
が一人寂しくキャンパスを歩いている。

漣、山田に気づき、小さく手を振るが、
山田は漣に気づかない。

漣、山田の行先を目で追う。

手元のレジュメには、『しょうもな』や
『クソ』などの不平不満のメモ。

○ブライアンウェディング・PA卓

音響機材やPCに囲まれた室内。

山田、PCで映像の編集をしている。

漣、床にしゃがみ込み、カメラの整備
をしている。

山田、編集集中の映像を見ながら、

山田「佐藤さんって、人の表情撮るの上手い
っすよね」

漣「そう？あんま得意と思ったことないけど」

山田「いや、上手いっすよ。やっぱり、人が
何考えているのとか分かるタイプですか？」

漣「（薄ら笑いしながら）いや全然。むしろ苦

手だね」

山田「そうなんすか？なんか人の感情がよく分かるからこそ、毎回涙流すところ綺麗に撮れていると思っていたんですけどね」

漣「……まー涙を流すタイミングは人よりも知っているかもね」

沈黙が流れる。

山田「なんか、湿っぽくなっちゃいましたね」

漣「……まあ私の話はいいから。それより、

山田は新しい友達できたの？この前、大学で見た時も一人で居たけど」

山田「……いつですか？声かけて下さいよ」

漣「いやー図書館だったからね」

山田「……まあ、僕と親しくしたって、いいこと一つもないんで」

漣「なんでそんな卑下するの？」

山田「卑下じゃないですよ。何かしら仲良くなるメリットがないと、人は寄って来ません。僕の場合、見てくれはご覧の通りだし、面白い返しもできないし」

濤「……よくそんな自分の弱みを言えるね。

私には絶対、無理」

山田「まー僕の場合、誤魔化し効かないんで」

山田、編集する手を止め、

山田「……やべ、携帯どこいったけ？」

濤「……トイレじゃない？この間みたいにな」

山田、ため息を吐き、席を立つ。

山田「ついでにタバコ一緒にいきます？」

濤「……しようがないな」

○同・披露宴会場

列席者で賑わう会場。

新郎（30）、新婦（30）が両親に向けて、スピーチをしている。

新婦「お母さん、お母さんはどんな時でも、私に寄り添ってくれたよね。そんな優しい背中を、小さい頃から尊敬していました」

濤、カメラを新婦に向け撮影している。

新婦「お母さんが私にかけてくれた言葉を、これからは私がタカシさんに掛けられるよ

うに頑張って行くからね」

新婦の母親（60）、号泣している。

漣、真顔で新婦の母親を撮影する。

新婦の声「お母さん、本当にありがとう」

撮影をしている漣、新婦の発言を聞き、
微かに口角を上げる。

○漣の自宅・漣の部屋（夜）

夜空にタバコの煙が滞留している。

漣、窓を開け、タバコを吸っている。

漣「ありがとうって久しく言われてないな」

光の声「……何かしんどいことでもあった？」

ベッドの上には光と通話中の携帯。

漣「しんどいこと？あり過ぎて、覚えてない

よ。……めちゃくちゃ話変わるけどこの間、

電車で女子高生が居て」

光の声「うん」

漣「会話の内容は一個も覚えていないんだけど、その姿が眩しすぎて」

光の声「言ってもさ、光も3年前はそうだった

たでしょ？」

漣「いやでもね、3年しか経ってないのによ、JK時代の自分を思い出せないって結構ヤバいなーって思ってる」

光の声「他の人より濃い3年を過ごしているからじゃない？」

漣、タバコを消し、ベッドに寝転がる。

漣「それもあるのかな？……でも、20過ぎても制服でデイズニー行っている人とかよく見るから。……なんかねー」

光の声「でも、皆が皆じゃないからさ。あと、

漣はよくやってるよ」

漣、窓の外を眺めながら、

漣「（笑いながら）ごめん、それ言わせるために私が誘導したみたいになっちゃった」

光の声「（笑いながら）私よりも数枚上手だね」

漣、少し微笑む。

漣「（小言で）なんで光にはこんなことも話せるんだろうね」

光の声「……頼れる時に頼ってよ」

夜空に月齢7の月が輝いている。

濤の声「……光に会ったら、もうお母さんに
会いたくなくなっちゃうなー」

○同・居間（朝）

焼き鮭を食している濤と和子。

和子「魚は駅前のあそこが美味しいわよね」

濤「山田屋？これ、そのやつだよ。昨日、
買ってきた」

和子、突然、濤に向かって指し箸する。

濤「……何？なんか足りない？」

和子、無言で指し箸を続ける。

濤「何？言ってくれないと分かんない。骨で
も刺さった？」

和子、指し箸を続けながら、

和子「……貴方……誰よ？」

濤、一瞬で真顔になる。

濤「……佐藤濤、貴方の娘ですよ」

和子、指し箸を続けながら、

和子「……貴方……誰よ？」

漚の手元、箸を強く握る。

漚「……私は……誰なんだろうね」

漚、壊れた様に笑い始め、涙が溢れる。

○グループホーム調布・外観

『グループホーム調布』の看板。

気の抜けた顔で施設から出てくる漚。

一度立ち止まり、背後を振り返る。そ

の後、前方へと歩き出す。

○漚の自宅・和子の部屋（夜）

夜空に満月が輝いている。

漚、介護ベッドの上でタバコを吸いながら、通話をしている。

デスクの上には、山積みされ、しわくちゃになった介護施設の取り寄せ資料。

光の声「お母さんが居なくなって寂しい？」

漚「……うーん、どうだろう。……不謹慎だけど、寂しさより活力かな」

光の声「……ん？それはどういう意味？」

漚「そのままだよ。これで私も普通の大学生になれるのかと思って」

漚、新しいタバコを吸う。

光の声「……前から聞こうと思ってたんだけどさ、漚にとっての普通って何？」

漚「……みんなと同じように自我を忘れる迄酒を飲んで。……友達と中身のない会話をして。……しようない恋愛をしてとか？」

光の声「それが普通なら、私は遠慮しとく。

……あと、漚のその言い方、あんまり普通になりたくなさそうに聞こえたけど」

漚「……そうかな？……でもごめん、間違い無くしんどい」

漚、涙が頬を伝い、手で拭う。

漚「（声を震わせながら）もうしんどい。なんで私だけこんな目に遭わなきゃいけないの」

光の声「……そうだよ、分かるよ。だから私がいる」

漚「……わかってる。でも、光にだけに頼るのもしんどくて。……だから、変わりたい」

光の声「……うん、わかった」

漑、落ち着き始め、窓の外を見る。

漑「（力を振り絞りながら）私はこんな世界から出ていきたい」

数秒間、部屋が静まり返る。

夜空には月暈が発生している様子。

光の声「……頑張ろうね」

漑の声「……」

○明成大学・外

雨が激しく降っている様子。

○同・4号棟・廊下

漑、多くの学生達に紛れ、講義室から

廊下へ出て来る。

成美、駆け足で漑を引き止める。

成美「佐藤さん、どこ行くの？」

漑「ん？どこって？」

成美「今日、行くんでしょ？飲み会」

漑、携帯を取り出し、確認する。

漚「顔を引きずりながら）あーそっか」

成美「そうだよ、行くんでしょ？」

成美、あどけない表情で漚を見つめる。

漚の携帯に『21…00光通話』のリ

マインダー通知が届く。

漚、しばらく携帯を見つめる。

漚「(数秒間考え抜いた末)……うん、行くよ。

お金下ろそうと思ってただけ」

漚、携帯を閉じる。

成美、笑顔を見せる。

漚と成美、横並びで廊下を歩き出す。

成美「よし！じゃー一緒に下ろしに行こう」

漚「いいの？」

成美「うん！私も現金なかったから！ねえ、

漚ちゃんって呼んでいい？」

漚「う、うん。勿論」

成美「よろしく！え、漚ちゃんは……」

○むつ市立中央中学校・理科室（夕・回想）

夕陽が差し込む理科室。

机の上に二つのビーカー。一つは湯気が出ている水、もう一つは湯気が出ない水。

二つのビーカーをまじまじと見つめる、

石狩光（14）。

光「……それで？」

光の見つめる先には、前田匠（50）。

前田「こっちの温かい方をこの場でそのまま放置していたら？」

光「水が冷めちゃう」

前田「そう。じゃあ、反対は？」

光「冷たい水が温かい水になるかってこと？」

前田「そう」

光「うーん……それは、ない！」

前田「うん、そうね。このように冷たい物から温かい物へ、自発的な移動ができないものを不可逆変化って言うんだ」

光「不可逆変化。……てことはさ、世の中のこつて大体不可逆変化？」

前田「（少し吹き出しながら）相変わらず鋭い

切り口を持っているね、ガリちゃんは」

前田、黒板を消し始める。

光「そう？だって、壊れていた物を修理したとしても新品の状態にはならないし、仲直りしたとしても少し気まずさは残るでしょ？幼稚園児でも分かるよ」

前田「それは言い過ぎだと思うけど。でも、確かに何事も元通りのように見せているだけで、元通りにはなっていないかもね」

光「でしょ？じゃあさ、普通が普通じゃなくなつて普通になつた状態と、普通じゃないが普通になつた状態って多分、ちよつと違うよね？」

前田「うーん、不可逆の理論を応用すると、恐らくそうなるね。にしてもこれ、かなりいい事に気づけていると思うよ。近い将来、ノーベル文学賞取っちゃたりして？」

光「物理学賞とかじゃなくて？」

前田「確かに。そっちも可能性あるね」

○スナック狩・外観（夜・回想）

汚れている『スナック狩』の看板。

○同・中（夜・回想）

数組の年配男性のお客と接客する石狩

みどり（34）。

店内の奥の座席で、周りの顔色を伺いながら宿題をする光。

光の声「じゃー私はみんなみたいな普通にはなれないのかな？」

前田の声「……大丈夫。その分、みんなと違う状態変化を知っているから」

光の声「……知っていたらさ、どんないい事があるの？」

前田の声「そうだな、色んな人の寂しさに共感出来ると思うよ」

店内をまじまじと眺める光。

光の声「……こんな友達いない私でも、誰かの役に立てるの？」

前田の声「うん、立てるよ。ガリちゃんはす

でに一つ寂しさを知っている。状態変化の数は寂しさを知った数だと思う。僕はそう、信じている」

○川村の自宅・居間（朝）

消灯中の室内。1 ㊦の間取り。

枕元の携帯からアラーム音。

漣、アラームを止める。

ロック画面には3／31の日付表示。

漣、眠そうに目を擦りながら、ベッドから起き上がる。

漣の隣には、眠っている川村の姿。

○同・キッチン（朝）

漣、手際よく朝ご飯を作っている。

寝起きの川村が入ってくる。

漣「おはようー、ダイチ君」

川村「（寝ぼけながら）おはよう」

○同・居間（朝）

ローテーブルに和食が並ぶ。

漣、引きで朝食の写真を撮る。

漣と川村、手を合わせる。

漣と川村「いただきます」

漣と川村、食事を口に運ぶ。

川村「んー、美味しい」

漣「（笑顔で）本当？味薄くない？」

川村「ん？全然。本当に美味しい。いつもありがとう」

夢中で食べる川村を見て、微笑む漣。

漣「ううん。逆にありがとう、毎回美味しそ
うに食べてくれて」

川村「……漣って、本当にしっかり者だね。
一人っ子だから？」

漣「そう？あんまり関係ないんじゃない？」

川村「……そういえば、最近実家帰ってない
けど、お母さん寂しがってない？」

漣「（少し躊躇い）うん。大丈夫」

川村「なんなら、今度一緒にご飯でも……」

漣「（強い口調で）いい！」

川村、少し驚く。

漣「（申し訳なさに）本当にいいから」

川村「……そっか」

漣と川村、再び食事を口に運ぶ。

○武蔵野公園（朝）

桜が開花している様子。

漣と川村、横並びで歩いている。

漣、桜を見ず、上空を見上げている。

川村、桜の木を指差す。

川村「ねえ、あっちの方が満開じゃない？」

漣「（空返事で）……うん」

川村、漣が上空を見上げるのを不思議

そうに見守る。

川村「……桜嫌い？」

漣「（我に返り）うん？ いや！ ていうか、桜嫌いな人なんている？ たただだ黄昏てただけ」

川村、頷き、桜を見る。

漣、ポケットに手をつ突っ込んでいる川村の表情を見上げる。

川村「なに？」

漣、川村のポケットに手を入れる。

○漣の自宅・和子の部屋（朝）

部屋には、シーツのない介護ベッド。

漣の声「いや、なんでもない」

川村の微笑む声。

川村の声「寒いのか？」

漣の声「んんん、むしろあったかい」

○ブライアンウェディング・PA卓

PCで編集集中の山田。

漣、穏やかな表情でカメラを整備している。

山田「……佐藤さん、なんかあったんすか？」

漣「ん？なんかって？」

山田「何って、聞いて下さいと言わんばかりに機嫌がいいじゃないっすか」

漣「そう？そんな単純な人間かな？」

山田「大分、単純ですよ。インドにでも行き

ました？」

漚「生憎パスポートは有効期限切れ」

山田「じゃー何があったんすか？」

漚、少し考えカメラを山田に向ける。

山田「なんすかそれ？」

漚「私は今まで、レンズをズームした世界を見ていたの」

漚が覗くカメラ画面、山田を対象に、ズームする。

漚の声「ズームをすると、遠くのを近くに引き寄せて見ることが出来るけど、視野は狭くなる」

カメラ画面、山田にピントが合う。

山田、ピースをする。

微笑みながらファインダーを覗く漚。

カメラ画面、~~田~~値を小さくし、背景にボケ感が出てくる。

漚の声「それと同時に、背景がぼやけて見える様になるでしょ。だから、より対象物を強調して撮りたくなっちゃう」

シャッターを押す漣。

背景にボケ感が出て、山田がピースを
している写真。

漣の声「一見綺麗に見える写真だけど、背景
やフレーム外に何が有ったのか分からない。
対象物にばかり目がいつっちゃうの」

漣、再びカメラを構え、ズームリング
とフォーカスリングを回す。

漣「だから、私は世界を広く見ることにした」
シャッターを押す漣。

先ほどよりも広角かつボケ感が出てな
い、山田が被写体となった写真。

漣「これからはこの撮り方で撮っていくの」
写真を見ながら、微笑む漣。

山田に撮った写真を見せる。

山田「まあ、ちょっとボケてますけどね」

漣「（小声で）……そうかな」

山田、ポケットの中を探りながら、

山田「（淡々と）まあ、でも、いいんじゃない
ですか？いいと思います。良かったですね」

漚「他人事すぎない？もっとかける言葉があつてもいいでしょ」

山田「いや、楽しそうな人に良かったですね以外かける言葉ありますか？あと、他人だし」

山田、PA卓から去って行く。

山田「携帯探してきますね」

漚、山田の背中を目で追う。

漚、自身の携帯を取り出しながら、

漚「（小声で）いや、頼ればいいのに」

漚、電話をかける。

どこからか鳴るバイブ音。

漚、周囲を搜索する。

デスクの横の隙間に山田の携帯。

漚「（小言で）ほら見ろ」

漚、隙間から山田の携帯を取り出す。

携帯に付いた埃を払う。同時に、ホーム画面が点灯する。

ホーム画面には、光から『いつでも頼つてよ』のメッセージ通知。

携帯を見て立ち尽くす漚。

慌てて、自身の携帯を取り出し、光とのトーク履歴を確認する。

履歴には、半年前に光宛てに『最近どうしてる？』と送ったメッセージ。

閲覧履歴は未読の状態。

漣、二つの携帯を見比べる。

山田の足音が聞こえてくる。

漣、二つの携帯をポケットに入れる。

山田「トイレになかったすわ」

漣「じゃー事務所とかじゃない？」

山田「そんなはずないんすけどね。ちよつと

電話かけてくれませんか？」

漣「……私？」

山田「他に誰かいます？」

漣「……ごめん、携帯、事務所だ」

山田「えーそんなことあります？」

山田、漣に呆れた表情を見せながら、

PA卓から去って行く。

漣、ポケットから山田の携帯を取り出し、デスクにそつと置く。

漚、再びカメラを整備し始める。

漚の表情はずっと曇ったまま。

メンテナンスをする手元が覚束ない。

漚、手を止め、ため息を吐く。

ポケットから自身の携帯を取り出す。

チャットアプリを起動し、山田のプロ

フィールを閲覧する。

誕生日が設定されていない。

漚、思案顔を浮かべた後、山田とのチャット

を表示する。チャット履歴の検索窓に『誕生日』と打つ。

デスクにある携帯に目を向ける漚。

漚、デスクの上にある山田の携帯を手

に取る。

躊躇しながらも、パスワード入力画面に『0815』を入力。

山田の携帯のロックが解除される。

○明成大学・4号棟・外

漚と川村、4号棟から出てくる。

川村「今日もう終わりでしょ？直帰？」

漣「あー……、今日は高校の同級生と会う予定があつて、今から会いに行く」

川村「同級生。……ちなみに誰？」

漣「ん？」

川村「いや、あんま高校の同級生と会っていい話、聞いたことなかったから」

漣「あー……えーと、山ちゃん」

川村「山ちゃん。……何大？」

漣「あー慶洋」

川村「賢いね……まあ、あんま介入し過ぎてもアレだから、楽しんできて」

漣「ごめんね、こっちこそ不安にさせて」

川村「……いや、じゃー俺OB訪問行くから」

漣「うん、じゃあ」

川村「じゃあ」

川村、去り際に、

川村「あと、週末。忘れないでね」

漣「うん」

漣と川村、手を振り離れて行く。

○喫茶高井戸・外観

○同・中

店内には数組の客。ソファ席に山田と
漣が横並びで座っている。

二人の間に沈黙が流れている。

漣、耐えきれずお冷を口にする。

山田、隣に居る漣を見ずに、

山田「……佐藤さん、僕ってどんな人間に見
えていました？」

漣「……山田？……前向きな人かな？」

山田「（苦笑しながら）前向きですか。……そ
うですか。……ちなみに今は？」

漣「（少し悩みながら）そうね、難しいね」

山田「……昔の佐藤さんは僕と同じ匂いがす
る人間でしたよ」

漣、横に居る山田の顔を見る。

ドア鈴が鳴る音。

岡田、店内に入ってきて来る。

店内を見渡した後、山田と目が合い、
こちらに向かって来る。

岡田「いやーごめんなさい、遅くなりました。
中々高井戸とか来ないもんで」

山田「いえ、急に呼び出してすみません。（漣
に向かって）こちらが光さんです」

漣「初めまして、佐藤です」

岡田「光です。よろしく願います」

岡田、ソファ席に座る。

店員（40）が注文を取りに来る。

店員「みなさんお揃いでしょうか？」

山田「はい、すみませんお待たせして」

岡田「僕、ブレンドコーヒーで」

漣「すみません、私も」

店員「かしこまりました。（山田に向かって）

お客様は？」

山田「あー僕はもう出るので」

店員「かしこまりました。ではブレンド2つ、
少々お待ちください」

店員が去って行く。

山田「……じゃあ僕はそろそろ」

岡田「あれ、そういう話だったっけ？一緒に話を聞くとおもうってただけど」

山田「いや、その予定でしたけど。……すみません、今日はもう帰らせて下さい」

山田、立ち上がり深々と一礼をする。

その後、急ぐようにして濡の上を跨ぎ、足早で店外へと出ていく。

ドア鈴が鳴る音。

○同・中

焙煎機が稼働する様子。

無言で互いにコーヒーを飲む濡と岡田。

濡「すみません、私が山田君に無理を言ったんです。光という方に会ってみたいって」

岡田「でしょうね。連絡をもらった時、何かあったのかとは予想していました」

濡「……あのー私とは初対面ですか？」

岡田「どこかで見たことある顔ですか？確かに街を歩けばそこら辺に居そうですね」

漣「いや、実は私の知り合いにも光という人物が居まして」

岡田「光なんて、世の中に何千といますよ。」

あと、私の本名は光では無く岡田義一と言います」

漣「（頷きながら）あーですよね。すみません」

岡田、コーヒーに口を付ける。

漣「……山田とはどこで？」

岡田「それは言えませんが、山田さんのプライバシーのためにも」

漣、少し沈黙した後、

漣「少し私の話をしてもいいですか？」

岡田「勿論」

漣「私の知り合いの光とは、ネットを通じて出会ったんです。そんな褒められた出会い方じゃないんですけど」

岡田、姿勢を正す。

漣「光は、いつも優しい言葉をかけてくれました。私の話なんか、面白おかしくなんかしない、ただ不満を吐いていただけなのに、

ずっと付き合ってくれました」

岡田「優しい方ですね」

漣「はい。けど、今はもう連絡が取れなくて」

岡田「もしかして、その光さんが私だと思いに？」

漣「はい、トーク履歴で拝見した、いや見てしまった山田と貴方の関係性が、以前の私達に似ていたもので」

岡田「なるほど。……すみません、ご期待に添えず」

漣「ですよ、そもそも性別が違いますもんね。お手数をおかけしました」

漣、コーヒーを勢いよく飲む。

岡田「私が光と名乗っている理由、知りたくないですか？」

漣、動きが止まる。

岡田「私達は自ら輝かない生物です。ただ、光の当て方次第でいろんな形へと変貌を遂げる、月の様にね。だから私達は、その変貌への媒介として光と名乗っています」

岡田、名刺を取り出し、漣へ渡す。

漣「……えっと、つまりどういう？」

漣、受け取った名刺を机の上に置く。

岡田「恐らく貴方が探している方は私と同志の方でしょう。私達とはあるコミュニティに所属し、皆が光と名乗り、とある目的のため活動をしています」

漣「じゃあ、私の探している光もそこに？良かったら、ご紹介してくれませんか？女性で20代で、堅い仕事をしていて……」

岡田「でも、もう連絡は取っていないんですよ？」

漣「……はい」

岡田「連絡を取っていないということは、もう連絡を取れないということ、すなわち取りたくないと言うことではないのですか？」

漣の手が微かに震え出す。

漣「……すみません、それはどういう？」

岡田「いや、巷で流行っている構文を使ったかったと言う訳ではないです。（力強く）……」

：友とは、いわばもう一人の自分である」

漣「はい？」

岡田「とある哲学者の言葉です。光さんと貴方は、かつて同じ寂しさを経験していたから、友達になれたと私は思っています」

○スナック狩・光の部屋・中（夜・回想）

月齢29の月が夜空に浮かぶ様子。

石狩光（14）、窓辺に座り、夜空を見上げている。

岡田の声「共感という感情を作り出すのは難しいですよ。人は、自分と近い人にしか本当の意味で共感できませんから」

漣の声「でも、私達はちゃんと共感できていたと思います。色々と話せていたから」

○喫茶高井戸・中

岡田、対面に座る漣を見つめる。

岡田「それは、今ですか？…。今も、昔と同じように、寂しさをその時の熱量で思い

出せるんですか？」

漣「……」

岡田「貴方は変わった。貴方の身の回りの5人も変わった。だから、光さんはもう居ないんじゃないんですか？」

漣、震えた手で自身を指差しながら、

漣「……私が光を遠ざけたんですか？」

岡田「……そうです。……貴方が変わったせいで光さんが居なくなった」

漣、コーヒークップを持とうとするが、手が震えて持てず、コーヒートを溢す。

漣「でも私は……普通になりたかっただけで」

岡田「……貴方が殺したと同義です」

漣、項垂れて黙ってしまふ。

岡田、少し寂しげに、

岡田「でも……しようがないですよ」

○漣の自宅・漣の部屋（夜）

新月が夜空に浮かぶ様子。

漣、窓の外の夜空を見上げている。

岡田の声「……共鳴している時に光というものは目立ちますから」

漣の頬を涙が伝う。

岡田の声「……貴方が殺したと言いましたけど前言撤回です。……光さんのためにも、光さんを殺さないで下さいね」

涙を拭う漣。

漣、携帯を手に取り、チャットアプリを開くが、すぐに閉じる。

携帯を持ちながら、三角座りをする。

漣の視線の先に、岡田の名刺が挟まった携帯の背面。

漣、携帯の背面をじっと見つめる。

○同・漣の部屋（早朝）

窓の外では、陽が昇り始めている様子。

壁に掛かっている月齢カレンダー。

漣の声「そうですね、分かります。……うん、……うん。……なるほど」

机の上には、しわくちゃになった岡田

の名刺とイヤホンが刺さった携帯。

携帯画面には、庄司奈津美と通話中の表示。

漣の声「私もそう考えていた時、沢山ありました。何もかも投げ出したって」

イヤホンを付けた漣、机の上にある携帯とは別の携帯を手に持っている。

奈津美の声「（ゆっくりと）なんか、みんな結婚していく中、いつまで私はこんな結果が出ないことやっているんだろうと思って」

漣、手に持つ携帯で『光コミュニティ・ハンドブック』のファイルを開く。

漣の視線の先には、『傾聴の原則…ミラーリング・テクニック』の文字。

漣の手元、ハンドブック内の『注意点…相手の声の変化を捉え、調整しましょう』と書かれた文字をなぞる。

漣「（ゆっくりと）…分かります。私も似たような経験あるので」

漣、窓の外を見る。眩しく目を細める。

奈津美の声「（ゆっくりと）本当ですか？ ありがたいです。……にしても、なんでこんなにも世界は私達に意地悪なんですかね？」

漣「……」

携帯のアラームが鳴る。

漣「あつ、すみません。この後用事があつて」

携帯のアラームを止める。

奈津美の声「いえいえ、ありがとうございます。急に連絡したのに出てくれて」

漣、何か言い出しづらい様子。

漣「……あのーこんな感じで大丈夫ですか？」

奈津美の声「こんな感じとは？」

漣「奈津美さんにとっていい時間になっていくかなって思ってる」

奈津美の声「……私は、今、すごく光さんに助けてもらっていますよ。周りの友達は、家族ができて、ライフステージが変わっていくから、中々こんなお話ができなくて」

漣「……お友達と話せなくなって、やっぱり寂しいですか？」

奈津美の声「んーどうでしょう。でも、縁が切れることを怖がっていたら、次には進めないとも思うから」

漣「……」

携帯のアラームが鳴る。

奈津美の声「あっ、すみません。話し過ぎましたね」

漣「いえ、こちらこそ。また、話したくなったらいつでも言ってくださいね」

奈津美の声「はい、じゃあ失礼します」

漣「失礼します」

携帯の通話が切れる。

漣、PCを開き、WEB会議を開始する。

漣「お疲れ様です、遅くなりました」

岡田の声「お疲れ様です。すみません、日曜のこんな早朝に」

漣「大丈夫です。ちょうど私用があったので」

岡田の声「……それならよかった。じゃーコ
ーチ面談始めますね。どうですか？始めて数
日経ちますけど」

漣「まー難しいですね。何が正解なのか分かんなさ過ぎて」

岡田の声「そうですね。皆さん、一人一人違いますから、対応も変わりますよね」

漣「……そうですね。性的嗜好に悩む方、家庭環境に悩む方、漠然とし過ぎた将来に悩む方などなど」

岡田の声「でも皆さん共通して、疎外感を感じている。話したいけど話せない人達です」

漣「確かに」

漣、何かを思い出そうとしている表情。

○光の自宅・光の部屋（夜・回想）

漣の声「なんで私の話をそんなに聞けるんですか？」

石狩光（25）、紙媒体のハンドブックを持ち、漣と通話している。

光「……なんで？」

光、ハンドブックを閉じる。

光「私も、昔よく話を聞いて貰ったからかな」

漣の声「光さんもですか？」

光「うん、似たような感情は抱いていたかな。

腹の底にあるあのやるせない気持ち」

漣の声「（ため息を吐き）一人で生まれて、一人で育ち、一人で生きていたかったです」

光「……でも、それは無理だよ、完全な孤独は避けられないから。だからさ、変えられるものを変えていくしか無い」

漣の声「変わるって、最近いい言葉に聞こえないんですね。大学デビューとか」

光「……でもさ、年の功かもしれないけど、私はいいい言葉だと思っているよ」

○漣の自宅・漣の部屋（早朝）

漣、考え事をしている表情。

光の声「変わることができた数だけ私は笑顔が増えていく気がする。だからさ、漣の世界をたくさん聞かせて」

漣「……岡田さん」

岡田の声「はい」

漣「アリストテレスも完璧ではないんですね」

岡田の声「……どうしました？」

漣「……友というものは、増えていく一方か
もしれないですよ」

岡田の微笑む声。

○友ちゃん・外観（夜）

○同・中（夜）

混んでいる店内。

掘りごたつの座席に座る漣と川村。

川村「（漣の表情を伺いながら）ねえ」

漣、川村の問いかけに反応する。

川村「この間、山ちゃんと会ったんでしょ？」

「どうだった？」

漣「あー……」

川村「……何？なんかあったの？」

漣「……ダイチ君」

川村「うん」

漣「……私のことどんな人間に見えている？」

川村、漣の顔を見ながら、箸を置く。

川村「そうだね。……しつかり者で俺にはできないことがたくさん出来る人？」

漣「という事は、私とダイチ君はあまり似ていないかな？」

川村「うーん。ぱっと見は？」

漣「……そっか」

『友』と刻印されているジョッキ。

漣、少し微笑む。

漣「……私のこと、張り倒したいでしょ？」

川村「（少し笑いながら）え？なんで？」

漣「だって、こんな本音を漏らせない奴、何しているか分からないでしょ」

川村「んー、まあ言われてみれば？」

漣、意を決する表情をする。

漣「……殴ってよ？」

川村「（少し驚きながら）え？」

漣、川村の顔をまじまじと見つめる。

漣「私のこと、殴ってよ」

川村「何でよ？」

漣「最後のー押しが必要な。だから、吹っ切れて話が出来る状態になるまで殴ってよ」

川村、漣の顔をまじまじと見つめる。

川村「……じゃあ、目を瞑って」

漣、目を瞑る。

川村、漣のおでこにデコピンをする。

川村「暴力は何も解決しないよ」

川村、ビールを飲む。

漣、微笑みを見せながら涙を流す。

漣「じゃあ、待って欲しい」

川村「……」

漣「理由は色々あるんだけど、今は腹を割って話せないんだけど、待って欲しい」

川村、漣の発言を聞き、頷く。

川村「……勿論。なんなら、気長にね」

川村、漣に笑顔を見せる。

漣、涙を拭い、ビールを勢い良く飲む。

漣「（少し吹っ切れながら）優し過ぎる！」

川村「え？」

漣「（小声で）……貴方は本当に凄い人だね」

川村、微笑む。

川村「オツケー。じゃあ今日は飲もう」

漣「飲もう、飲もう」

漣、ビールを勢いよく飲み、空にする。

漣「すみませーん、おかわり」

○道（夜）

閑静な住宅街。

漣と川村、手をつなぎ歩いている。

漣、上空を見ている。

川村「……漣って本当に空好きだよね？」

漣「……嫌いな人の方が少ないでしょ？」

川村、足を止め、上空を見上げる。

漣も、足を止め、上空を見上げる。

川村「（小声で）……首もげそう」

漣、微笑む。

漣「……でも本当に私、月が好きなのかもね」

川村「（漣を横目で見ながら）……そうね」

○明成大学・図書館・中

漚、窓際の席で外の景色を眺めている。
外には、仲睦まじそうな学生達。

漚が何かを見つけた表情をする。

漚、荷物をまとめ、急いで席を立つ。

○同・外

キャンパスには大勢の人々。

漚、人混みをかき分けながら、小走り
をしている。

漚の目の前に、一人で歩いている山田
の背中が見えてくる。

漚、山田を引き止める。

山田、驚いた表情を見せる。

漚「(息を切らしながら)……ちよつといい？」

○喫茶高井戸・中

机を挟み、対面で座っている漚と山田。

漚「まず謝らせて欲しい。携帯を勝手に見て
しまった事。本当にごめんなさい」

漚、頭を下げる。

山田「別にいいですよ。謝られたところで、

僕の問題は解決しませんから」

漑「……自分で言うのもなんだけど、元々は

山田の気持ちを知れていた側だと思うから」

山田、視線を漑に向ける。

漑「望んでいないかも知れないけど、知って

いた分、多少はまだ寄り添えると思うから。

……その時は、良いように使って欲しい」

山田、視線を外の景色に移す。

漑、山田の態度を見て、少し俯く。

山田「……佐藤さんは夜が来るの嫌いでした？」

漑「（少し微笑み）私はね、大っ嫌いだったよ」

山田「（少し微笑み）よかった。助かります、

まだギリこっち側で」

漑と山田、互いに微笑む。

山田「……ここってタバコ吸えますかね？」

漑「どうだろう。……辞めたからあまり気にして無かった」

山田「店員さんに聞きますか」

漣「その前に……何食べるか決めよう！」

山田「勿論、奢りですよね？」

漣「えー」

○グループホーム調布・中

漣、和子の面会に訪れる。

室内には数人の認知症患者。介護士達に介護されながら、生活をしている。

和子、一人、窓の外を眺めている。

漣、和子のもとに行き、隣に座る。

漣「（和子に対して）久しぶり」

和子、漣へ返答せず。

漣「……どこを見ているの？」

和子、ゆっくりと漣の顔を見ては、視

線を前方へ戻す。

漣「……しばらく来られてなかったよね、ごめんなさい。元気していた？」

和子、漣の問いかけに返答せず。

漣「私はね元気になったり、落ち込んだり。

まあ、人生そういうものですよね」

漚、窓の外で、記念撮影をしている家族を見つける。

漚「……そうだ」

漚、携帯を取り出し、和子と自撮りをしようとする。

和子、不思議そうな表情をする。

漚「じゃあ、取るよ。はい、チーズ」

漚、和子と自撮りをする。

写真を確認する漚、少し微笑む。

和子、漚の顔をゆっくりと見つめる。

和子「……貴方……誰よ？」

目の前の窓に映る自分を見つめる。

漚「……私の名前は漚。でも、実はこれだけじゃない。知ってた？」

和子、漚を見つめる。

和子「……貴方……誰よ？」

漚「もう一つの名前は……」

『光』

(了)